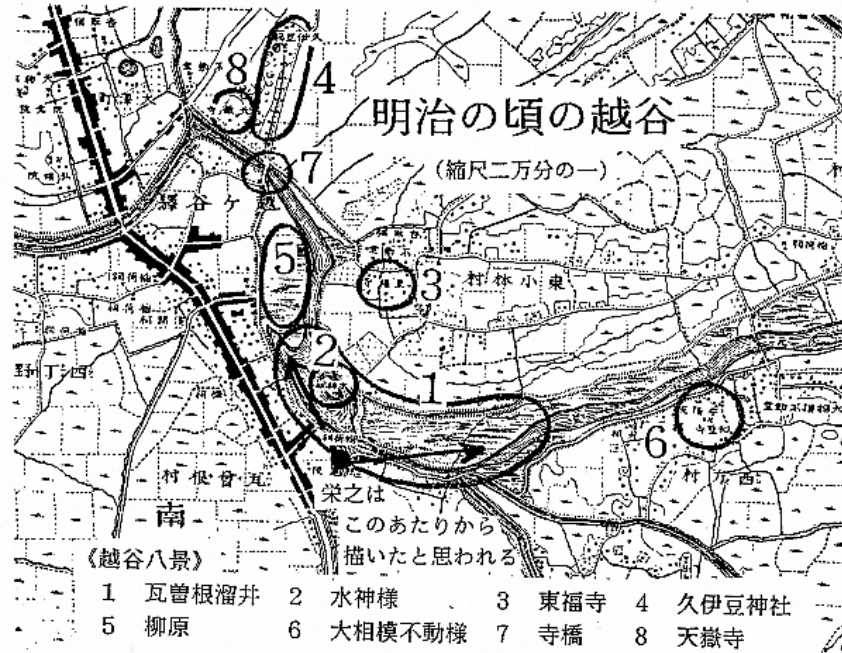


平成12年10月22日(日)

第26回 越谷市民まつり

郷土研究会 展示出品紹介



『越谷八景』

越谷市郷土研究会 加藤 幸一

『増林地区の江戸時代の寺社』

越谷市郷土研究会 山本 泰秀

越谷八景

加藤 幸一

「越谷八景」は、明治期の越谷町の漢詩人、山本梅塘が明治初年に中国の「瀟湘八景」やそれにならってできた日本の「近江八景」「金沢八景」などにならって設定されたものである。

「越谷八景」とは、瓦曾根の帰帆（帰路につく船）・水神の落雁（空から舞降りる雁）・東福寺の秋月（秋の月）・久伊豆の暮雪（暮れ方に降る雪）・柳原の夜雨（夜の雨）・大相模の晴嵐（晴天の日に山に立ちのぼる山気、山中に特有の冷え冷えとした爽やかな感じの空気や雰囲気）・寺橋の夕照（夕日の光、夕映え、夕焼け）・天嶽寺の晚鐘（暮れの鐘）の八つの景勝をさした。

なかでも冒頭に記された瓦曾根の帰帆は、瓦曾根溜井のすぐれた景観をバックにしてとらえたもので、この瓦曾根溜井の様子はすでに江戸時代の浮世絵の大家、鳥文斎細田栄之によって描かれている。これが後に「瓦曾根溜井図」（越谷市文化財・越谷市立図書館にて保管）と呼ばれているものである。この絵は、栄之が瓦曾根村の名主の中村家（溜井図では向かって右の手前にある大きな屋根と大きな松）に遊びに来た時に瓦曾根溜井の景観に感動して描いたものと思われる。

満々と水をたたえた溜井とその水面に舞い立つ白鷺、溜井の中程にある「松土手」と呼ばれる中土手とその周辺の河岸場（河川の岸の船から人や荷物を揚げ降ろしする所）や帆船の様子、その中土手（河岸場）に渡るための瓦曾根橋、森や鳥居の一部が小さく描かれている水神社の小島、その対岸の河畔砂丘で一段と小高くなった所にある東福寺の松林、柳原の岸辺に生い茂っている葦と小舟に乗って四ツ手網で漁をしている様子などが水墨画（墨絵）として描かれ、当時の瓦曾根溜井の様子が忍ばれる。

《越谷八景》

瓦曾根の帰帆

瓦曾根溜井の松土手で荷揚げが終わって帰ろうとしている空船（積み荷のない船）と周囲の溜井の情景。なお、松土手とは溜井の中程にあった松のみられた中土手で、葛西用水と元荒川とを区切っている。この松土手は、すでに享保年間（一七一六〜一七三六）から河岸場が設けられ、商品荷物や年貢米輸送の積み出し場になっていた。

水神の落雁

瓦曾根溜井内の離れ小島（今はない）に祭られた水神の祠と空から舞い降りる雁の情景。現在、水神様の祠は東越谷二一〇一三の島根家に移されている。

東福寺の秋月

元荒川の自然堤防が発達した砂丘上にある東福寺とその寺の松林にかかる秋の月の情景。

久伊豆の苔雪

越ヶ谷町の久伊豆神社とその参道の松並木に降る暮れ方の雪景色。

柳原の夜雨

柳原（現在の柳町あたり）に生い茂る柳に降る夜の雨の情景。柳原のそばに流れる元荒川の広い河原一面には葦や真がまが生い茂り、土手側には柳が生い茂っていた。

大相模の晴嵐

大相模の不動尊とその周囲に繁っていた大木に晴天の日に立ち込める山気（さんき）の情景。

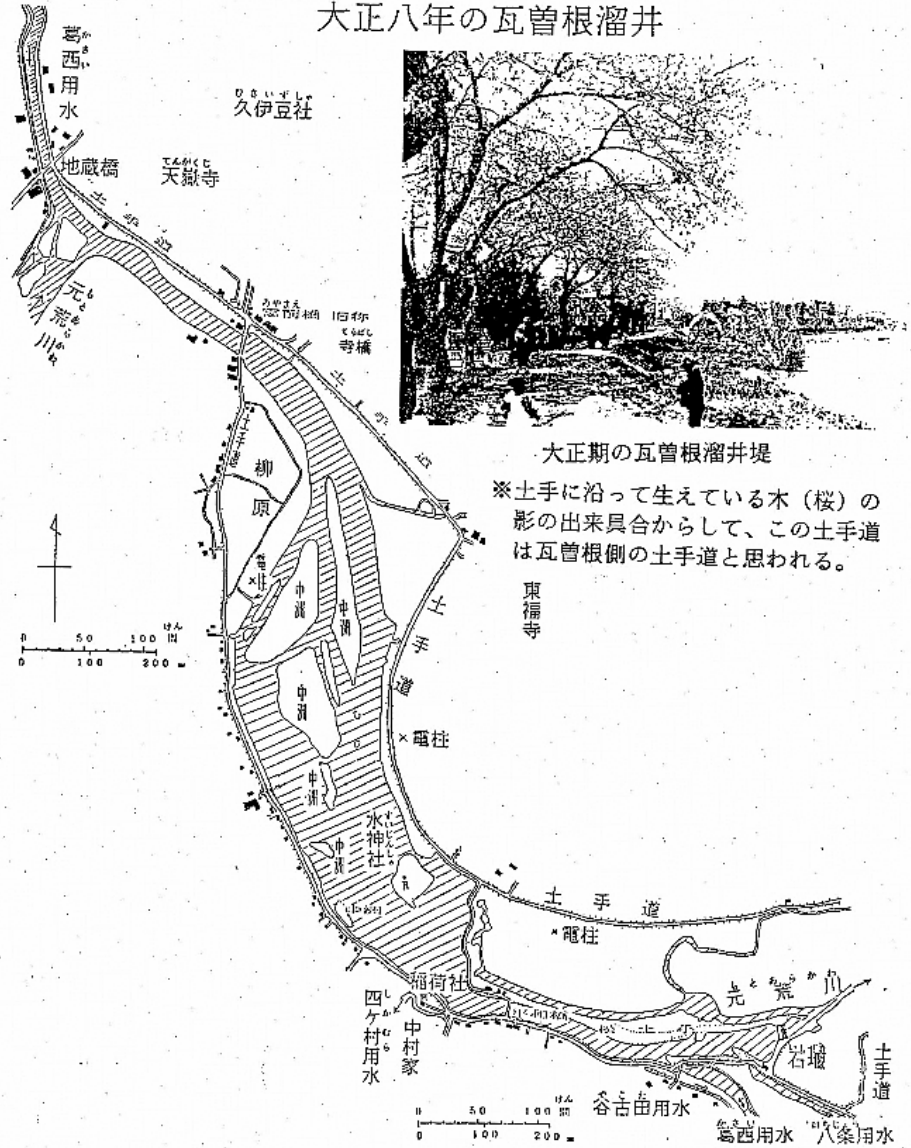
寺橋の夕照

元荒川に架かる寺橋（現在の宮前橋）と河岸にある樹木に囲まれた草葺き屋根の家々などが夕焼けで川に映った情景。なお、寺橋とは、天嶽寺に通じる橋という意味。今日では、久伊豆神社（お宮）の参道に通じることから宮前橋（みやまえばし）と呼んでいる。

天嶽寺の晩鐘

天嶽寺とその寺の暮れ六つ（現在の午後六時頃）の鐘の鳴り渡る周辺の趣とその情景。

かわらぞねためい
大正八年の瓦曾根溜井



大正期の瓦曾根溜井堤
※土手に沿って生えている木(桜)の影の出来具合からして、この土手道は瓦曾根側の土手道と思われる。

「埼玉縣北葛飾郡松伏溜井 葛西用水路ヲ経テ 同縣南埼玉郡瓦曾根溜井間 現状図」(大正八年七月測量製図 鑑定人 木邑富藏 坂本茂一郎)のうち 第三号の地図をもとに作成
作成者 加藤幸一

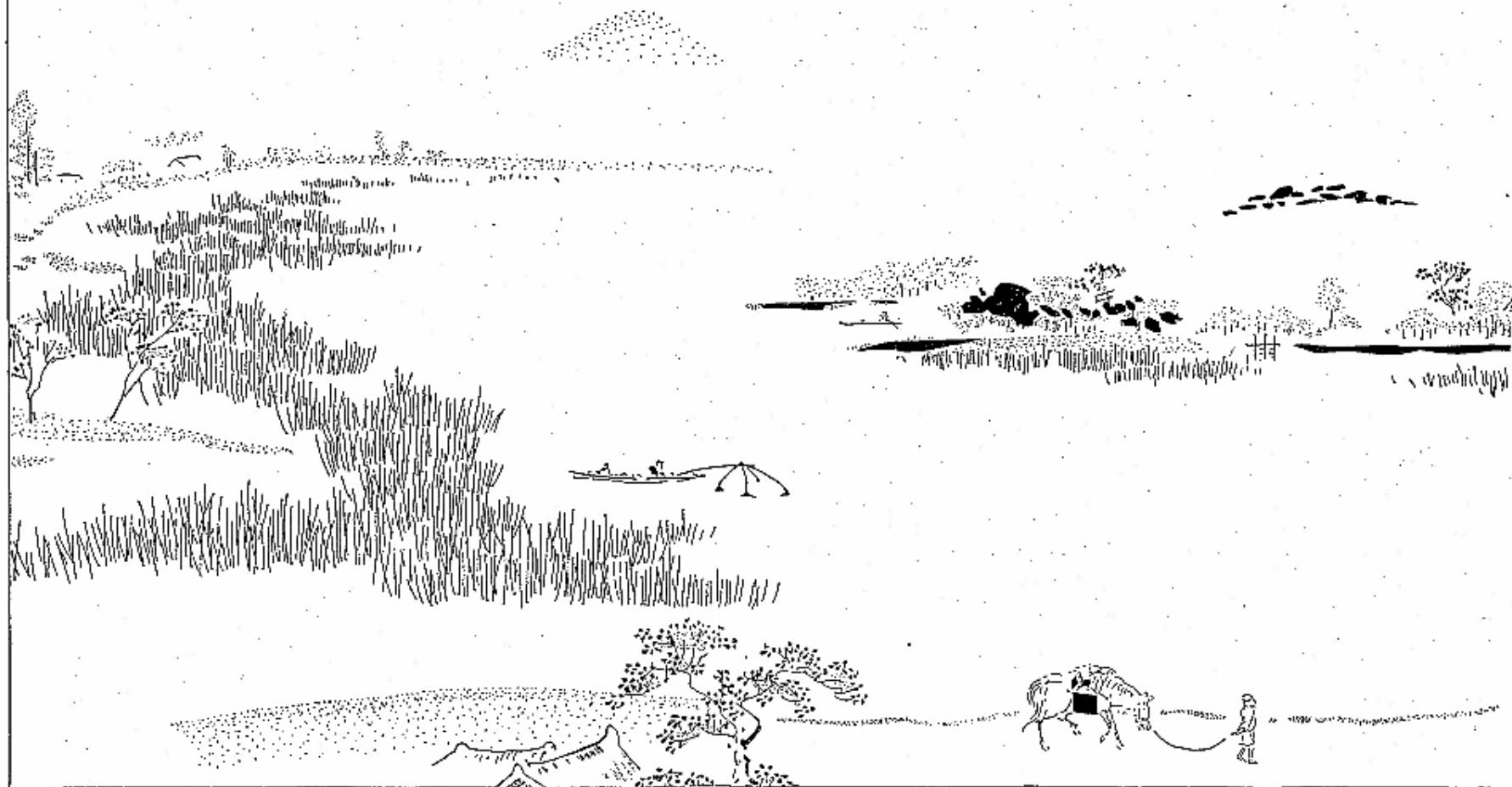
鳥文斎栄之の『瓦曾根溜井図』（向かって右）

実物を元にできるだけ正確に模写。縮尺 1/10。製作者 越谷市郷土研究会 加藤幸一

栄之
之
筆



鳥文斎栄之の『瓦曾根溜井図』（向かって左）



増林地地区の江戸時代の寺社

山本 泰丞

江戸時代中期には、当地に多くの寺社が存在していたが、明治維新に出された神仏分離令とそれにもなつて起こつた廃仏毀釈運動によって多くの寺院が破壊され、現在は寺院のない墓地となっているなど、かすかに当時の名残がみられる。そこで江戸期の寺社について紹介したい。

増林地地区（旧増林村・増森村・中島村・花田村・小林村）で現在住職の在住する寺院を宗派別に分けてみると、真言宗二カ寺、浄土宗・曹洞宗各一カ寺である。それ以外の江戸期に遡る次の二宗派について調べてみた。

《本山修験宗（天台密教）》

増林の梅光院、大正（だいしょう）院、増森の清学（せいがく）院がこれに属する。「新編武蔵風土記稿」によれば、これらは幸手不動院が本寺である。幸手不動院は、江戸時代に現在の春日部市の小淵観音院周辺にあつた。葛飾郡幸手領に属していたため幸手不動院と呼ばれたのである。江戸時代は隆盛を誇つたが、明治維新の廃仏毀釈の影響で衰退し、大正に入って東京の砂村（現、江東区南砂町）に移転した。その後東京大空襲で焼失し、戦後は台東区竜泉にある正法院（しょうほういん）に合併された。跡地は曹洞宗の中央寺となる。

《日蓮宗》

増林唯一の日蓮宗派の寺院があつた。法立寺と呼ばれた。この法立寺の本寺は本土寺である。そこで本土寺について紹介する。

本土寺は現在も松戸市平賀にある。山号は長谷山、本尊は大曼陀羅である。天正十九年（一五九二）、徳川家康がこの寺に寺領十石の朱印を付し、隆昌を極めた。法立寺はその末寺であつたのである。

江戸時代の増林地地区の寺社を文政年間の寺院明細をもとに一覧表にしてみると次のようになる。

増林地区の江戸時代の寺院

村名	寺院名	宗派	本寺	本尊	開山年か没年	
増林村	林泉寺	浄土宗	増上寺	阿弥陀如来	本誉・文正元年三月没	
	清伝寺	浄土宗	林泉寺	阿弥陀如来	證誉・寛永十年十月没	
	浄泉院	浄土宗	林泉寺	阿弥陀如来		
	勝林寺	曹洞宗	福蔵寺	十一面観音	閻契・天文元年八月起	
	清涼院	曹洞宗	勝林寺	聖観音菩薩	嶺順・元禄11年11月没	
	福寿院	新義真言	照蓮院	聖観音菩薩	長清・寛文三年一月没	
	宝蔵院	新義真言	金乗院	不動明王	祐範・延宝四年11月没	
	法立寺	日蓮宗	本土寺	三宝祖師	日明・正保元年12月没	
	梅光院	本山修験	不動院	不動明王	宥秀・慶安四年五月没	
	大正院	本山修験	梅光院	不動明王	(なし)	
増森村	密蔵院	(風土記稿に記載なし)				
	東正寺	新義真言	金乗院	大日如来	賢永・天文二十一年起	
	観音寺	新義真言	東正寺	阿弥陀如来	尊賢・大永三年起	
	金蔵院	新義真言	東正寺	十一面観音	良識・元和元年起	
	真正寺	新義真言	東正寺	十一面観音	尊海・寛永六年起	
	真光寺	本山修験	不動院	阿弥陀如来	賢明・寛永七年起	
	清学院	本山修験	不動院	不動明王		
	中島村	正福寺	新義真言	金乗院	大日如来	
		花田村	西円寺	照蓮院	聖観音菩薩	
	小林村		東福寺	照蓮院	虚空蔵菩薩	快春・延宝七年11月没
蓮乗院		新義真言	東福寺	地藏菩薩		
東光院		新義真言	東福寺	薬師如来		
観音寺		新義真言	東福寺	十一面観音		

※以上より、元荒川流域より古利根川流域に寺院が多い。古利根川流域の方が社会活動・文化活動が盛んであったことがわかる。

増林地地区の江戸時代の神社

村名	神社名	管理者	現在名と備考
増林村	浅間社 山王社 香取社 香取社 八幡社 稲荷社 天神社 天神社 神明社 神明社 三十番社	福寿院持ち 福寿院持ち 宝蔵院持ち 村持ち 梅光院持ち 梅光院持ち 大正院持ち 大正院持ち 村持ち 大正院持ち 村持ち 法立寺持ち	護郷神社(大正時代以後村社) 香取神社(明治時代まで村社) 天満宮
増森村	香取社 水神社 弁天社 第六天社 稲荷社 稲荷社 稲荷社 天神社 清瀧社	東正寺持ち 金蔵院持ち 眞正寺持ち 清学院持ち 観音寺持ち 東正寺持ち 清学院持ち 東正寺持ち 東正寺持ち	増森神社
中島村	稲荷社 諏訪社	正福寺持ち 正福寺持ち	中島神社 中島神社
花田村	稲荷社 第六天社	西門寺持ち 西門寺持ち	
小林村	神明社 香取社 水神社	東福寺持ち 観音寺持ち 村持ち	香取神社

※神仏習合思想の中から生まれた神社は、ほとんど寺院持ちであったことがわかる。

今でも身近な畑地に埋もれている 江戸時代の『面子』

『メンコ』（※1）とは、江戸時代からある子供のおもちゃである。

江戸時代のメンコは、粘土を焼いた直径一寸（三センチ）程のもので、「面型」とか「泥面子」「面子」「面打ち」と呼ばれた。直径一寸程の面型に粘土を詰めて焼いたものである。江戸時代中期から幕末にかけて流行した。図柄模様に当時の人気俳優の紋章、火消しの纏い、恵比寿、大黒、鬼、狐などが描かれていた。遊び方は、地面に六から十六くらいの区画を描き、一定の位置から投げ入れ、相手のものに重なれば自分の所得となり、もし線の上にかかれば逆に相手にとられる。この方法を江戸では「きず」といい、京では「むさし」、大坂では「とく」と呼ぶなど、各地でそれぞれの呼び名で流行した。また、おはじきの遊びなどにも用いたり、銭に代わってこの「泥メンコ」を使った「穴一」（※2）も盛んに行われた。

明治十年代に薄い鉛製の鉛メンコが登場した。しかし鉛害が問題となったため長続きせず廃れた。遊び方は、江戸時代の遊び方に、さらに今日のメンコ特有の、相手を反転させる《起こし》を生み出した。

明治三十年代には、印刷した紙を板紙（ボール紙）に張り付けた紙メンコが全国的な流行をみせた。紙メンコは色彩が美しく、大きさも自由であった。遊び方は、地面に打ち付けて相手のメンコを裏返しにさせたり、その下に自分のメンコを入れたりすれば勝ちとなる。

ここに展示されている『泥メンコ』は、山本泰秀氏（増林二一四九四）によって越谷市の増林地区で表面採集された貴重なものである。江戸の町から、畑にまく下肥（肥料としての人の糞尿）の中に混じってこの地に運ばれたのであろうか。又は、この地がかつて子供たちによって遊ばれていたメンコかもしれない。

泥メンコは、増林地区以外にもある。畑の中をじっくりと探してみてもいいが、埋もれていた泥メンコを発見するかもしれない。

※1 メンコの解説にあたっては、日本大百科全書（小学館）及び大百科事典（平凡社）を主に参照した。（加藤幸一）

※2 穴一とは「地面にあり穴の穴に約1メートルを附て穴外から銭をうち込み、穴に入ったものを所得とする遊戯」（広辞苑）